

中高生のまちづくりワークショップによる町への関心の変化

－愛媛県松野町でのワークショップの経験から－

Change of the interest in town by the town planning workshop of junior and senior high school students

-From the experience of the workshop in Matsuno town, Ehime-

土屋泰樹*・藤田尚樹*・青木悠輔*・大室春喜**・中井俊裕***・沼田麻美子***

Yasuki Tsuchiya*・Naoki Fujita*・Yusuke Aoki*・Haruki Omuro*・Norihiro Nakai**・Mamiko Numata

It is important to have interest of our town for Community Development and creating civic pride. However, we have little opportunities to have interest in our town in our life. So, we planed the Community Development workshop of junior and senior high school students in Matsuno Town, Ehime. We aimed to provide an opportunity to have interest in their town and consider the elements to plan a better workshop.

In this workshop, we could have important points. First, Local Study was very necessary. It was to make an opportunity to investigate the town. Second, using hands and thinking made them understand the town deeply. Finally, the presentation could create the interaction of other generations of people.

Keywords: Community Development, Workshop, Local Study

まちづくり、ワークショップ、地域学習

1. はじめに

1.1. 背景

まちへの関心を持つことは、まちづくりやシビックプライドの形成の前段階として重要である。しかし、普段生活する中ではなかなか町への関心を持つきっかけが生まれにくい。そこで愛媛県の中山間地域である松野町において中高生向けのまちづくりワークショップを開催した。

なお、筆者の一部は昨年度にもワークショップを実施しており、報告済み¹⁾である。

1.2. 本報告の目的

ワークショップを実施した松野町は人口が少ないため、まちづくりへの関心が高い大人が一定数存在し、なんらかのイベントがあると役場職員や町議員が集まる。ワークショップの報告会でも町長と町議会議員が来場し、中高生の発表へフィードバックを行った。特にこのような小さなまちではワークショップが単なるワークショップに終わるのではなく実際に中高生の意見を町へ反映させるきっかけになりうるのではないだろうか。意見の反映があれば、ワークショップが関心を持つきっかけとなった参加者が関心を持続ける理由になると考えられるため、特にこの点に着目して報告を行う。

1.3. ワークショップ概要

中高生を対象としてワークショップを企画した。ワークショップの目的は中高生のまちに対する関心を持ってもらうこと、最終的にはまちへの愛着を持ってもらうことである。

ワークショップは2019年の9月と11月の2回に分けて行われた。各回2日間行われ、参加人数は約15人であった。ワークショップの中では都市計画を専門とする教員による

模擬講義も各1回行われた。

1 回目のワークショップでは主にインタビュー調査を行いまちの課題を整理した。2 回目のワークショップは2 グループに分けて実施した。1 回目のグループではインタビューや追加調査にもとづいて町の資源をマップ化し、まちの課題の一つである働く場を考えた。もう一方のグループでは道の駅を建て替えるという内容で設計を行った。必要なプログラムや間取りを考え、実際に模型の製作まで行った。

1.4. 本報告の構成

2 章ではワークショップを行った松野町の概要を説明する。3 章で 1 回目のワークショップで行ったインタビュー調査について述べる。4 章及び 5 章では 2 回目のワークショップでの内容を報告する。6 章で前章を踏まえたうえで考察及びまとめを行う。

2. 松野町概要

松野町は愛媛県の南予地方に位置する自治体で、人口は約 4000 人、高齢化率は約 42.5%である。図-1に所在を示す。町の中心を四万十川の源流が流れる中山間地域の町で、町の面積の 84%を山林が占め、「森の国」をキーワードにまちづくりを進めている。

主な産業は農業で梅、栗や柚子などを栽培している。職場として隣接する宇和島市や鬼北町に通勤する人も多く存在する。

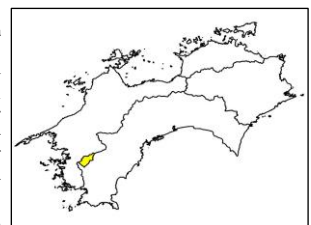


図-1:松野町所在

* 学生会員 東京工業大学環境・社会理工学院(Tokyo Institute of Technology)

** 非会員 東京工業大学環境・社会理工学院(Tokyo Institute of Technology)

*** 正会員 東京工業大学環境・社会理工学院(Tokyo Institute of Technology)

3. KJ 法による課題と魅力の抽出

3.1. インタビュー調査概要

最初に、4グループに分かれてインタビュー調査を実施した。インタビュー先を表-1に示す。目的は中高生にとって普段は話さないような人の話を聞くことでまちと町が実施している居住や生活の支援策について知ることである。

表-1:インタビュー先

グループ	職業等
①	ふるさと創生課 課長
	農業従事者
	革細工工房代表
②	飲食業者(宇和島市にて勤務)
	菓子業者(松野町にて企業)
③	保健福祉課 課長
	保育士
	道の駅店長
④	石材屋
	タクシー運転手
	桃農家、生活研究協議会代表
	移住コーディネーター

インタビュー先の選定は町役場の担当者とともに選定を行った。グループ①では松野町での典型的な職についている人に対して、②では松野町で起業した人と宇和島市に勤務する人にインタビューを行い、新たな働き方を提示した。③は町内での生活に関連する方々にインタビュー調査を行い、町内での生活や子育てについて知ることとなった。そして④のグループでは松野町で長く居住している方と移住コーディネーターに話を聞くことができた。

3.2. KJ 法による結果の整理

インタビュー調査を終えたあとに、各グループから一名ずつ集まって新たなグループを結成した。互いのヒアリング内容を共有しながら付箋に書き模造紙上に貼りだしていった。それから、アイデアを整理し、発想法として用いられている KJ 法を用いてインタビュー調査から抽出した町の課題と魅力を抽出した。KJ 法の結果を図示したものを図-2に示す。

3.3. まとめ

KJ 法によってまちの課題としては Wi-Fi が利用できる遊ぶ場所や仕事場が少ないこと、魅力として町に資源がたくさんあることなどが浮かび上がってきた。これらをもとに二回目のワークショップの企画を行った。

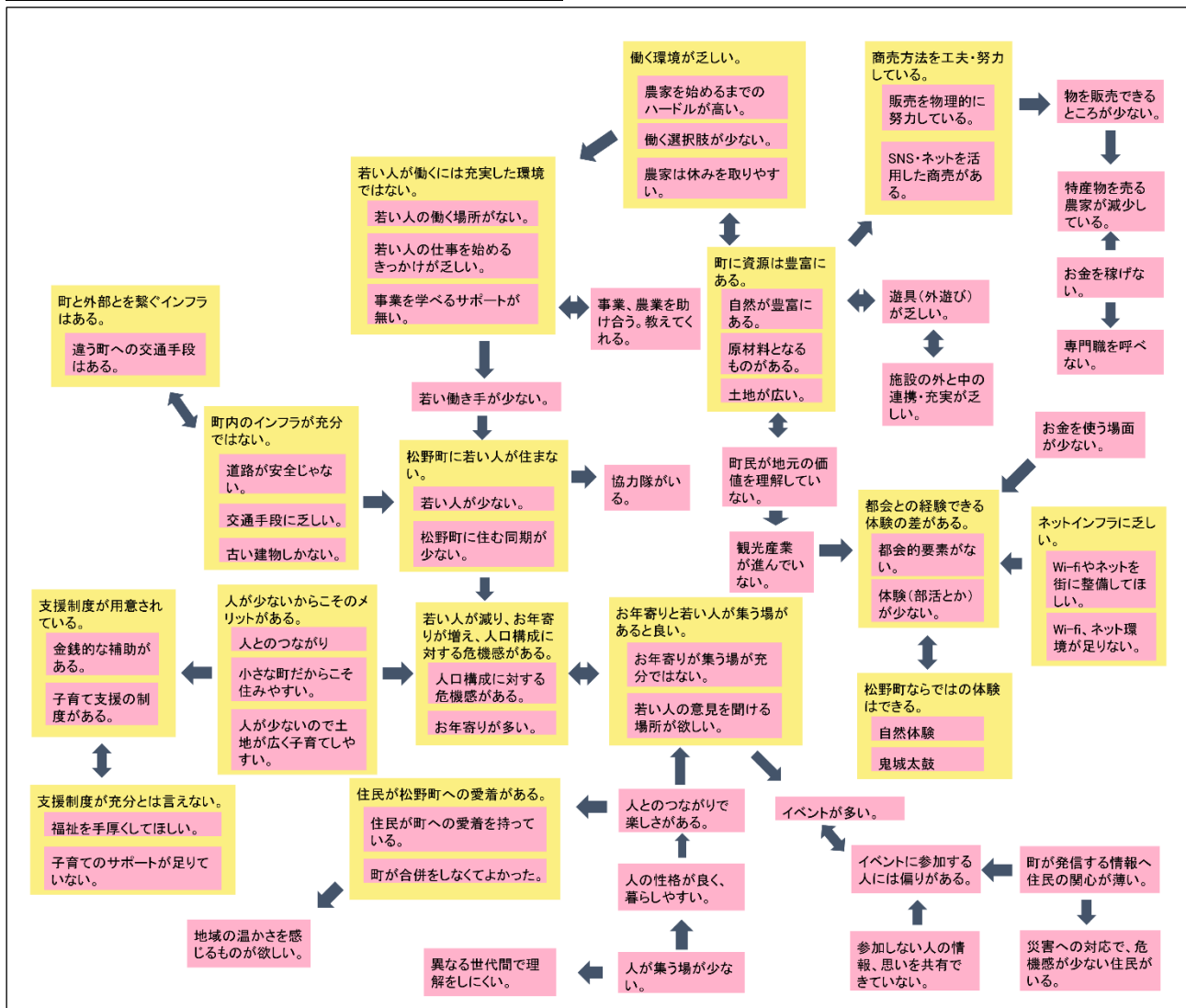


図-2:KJ 法によるヒアリング結果の整理

4. ジョブマップ班

ジョブマップ班では、今の参加者達が将来の夢を叶え、松野町で働くにあたり、地域の資源や施設をどう活用していくか地図を用いて試行錯誤した。成果品として参加者達が地域により高い関心を持ち、イメージを膨らます「ジョブマップ」を作成した。

4.1. 目的

インタビュー調査結果をまとめた KJ 法では「若い人が働く場所がない」「働く環境が乏しい」が大きな課題として挙げられ、魅力として「資源が豊富」が挙げられた。この 2 点に着目し、大人になっても松野町に住み続けることと U ターンを想定し、松野町の豊富な資源を生かして、どのような仕事をどう営めるのかを参加者達が構想する地図を作成する。資源や施設の所在、参加者がしたいことを照らし合わせ、松野町の可能性と課題を検討することを目的とする。

4.2. 事前アンケート

ワークショップの実施前に、中学校に協力してもらい、中学 1 年生から中学 3 年生まで 78 人を対象に将来働きたい職業、松野町で働きたい職業の 2 つについてアンケート調査を実施した。結果は表-2 の通りとなった。結果から農林水産業については本来働きたい職業と松野町で働きたい職業とが一致し、将来も松野町で働く可能性が比較的高いと推測した。そこでワークショップでは、若い人の仕事選びで重要となる役場・医療・教育分野の公務員、農業・飲食・販売・工房分野の一般的な職業の 2 つに分けて、2 つのマップを作成した。

表-2: アンケート調査結果

職業	人数
役場・公務員	23
医療系	11
ものづくり(工房・建築)	10
販売・飲食	9
農林水産業	17
その他	12
不明	3
松野町では未定	5

4.3. マップの作成

4.3.1. 公務員マップ

松野町には公務員の仕事として、役所、小中学校、農林公社などがある。また医療関係では診療所、美容院などがあり、これらの仕事場を地図上にプロットした。

次に実際の仕事内容と参加者達の働きたい内容、姿を照らし合わせることで、既存の施設の活かし方と働き方について課題を提案した。特に公務員の仕事については、松野町をもっと発信したい、向上させる働き方がしたいという意見から、活用できる地域資源として駅を挙げ、簡易的な観光案内所、お土産や記念品を展示し販売することを提案した。他にも松野町の人と接したい、要望に答えたいということを反映させるために、副業として子供と関わられるような施設や働き方の観点に着目し、提案を行った。図-3に作成したマップを示す。

図-3に作成したマップを示す。

参加者達は公務員マップの作成を通して、公務員の仕事場の数は限られることを発見した。そこから、働く場所を増やすのではなく、仕事内容や既存の施設の活用などに地域の参加者達の意見を反映させた提案が生まれた。



図-3.作成した公務員マップ

4.3.2. 一般マップ

次に既存の資源を活かした一般的な雇用の創出についてジョブマップの作成を行った。資源を活かした地域活性化のプランを考え、それに付随してどのような働き手として関わりたいかを考察するという流れで作成した。

役場から入手した資料やワークショップの中で、桃や梅・滑床溪谷・芝不器男記念館のような主要な資源だけでなく、しいたけや柚子、雷漬け、ツガニ、ジビエなど、沢山の資源を発見した。次にその資源を活用するための拠点作りについて、大きく 2 つの観点から議論を行った。

1 点目は町内の資源の活用である。製造から集積・貯蓄、販売までを松野町で完結させるような 6 次産業化のシステムを導入していくことで、より若者にとっても魅力的な雇用の場が生まれるのではないかと提案を行った。特に、販売に関してはインターネットなど情報技術を使った町外への

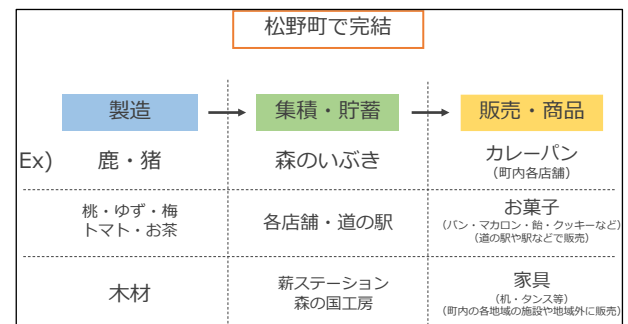


図-4.6 次産業化の概要

発信、EC サイトでの流通促進などの時代の変化への対応の必要性にも言及した。この提案以外にも地元の木材を使用して地域の施設をリニューアルすることや、オリジナルの家具を製作するといった斬新な提案もあった。6 次産業化の概要を図-4に示す。

2 点目は観光についてである。松野町内で食・体験・宿泊を完結させるような滞在型の観光プランの提案を行った。それに付随して、観光案内所やゆるキャラによる PR 推進等の新たな働き方の創出を検討した。図-5 に作成したマップを示す。

参加者は一般マップの作成を通して、農作物などの多くの地域資源、町の施設などの地域資産を照らし合わせることが可能となった。その結果、生産から貯蔵、販売までの一連の流れを作る提案が生まれたと考えられる。

4.4. まとめ

町への関心という観点からは参加者は地図に落とし込むなかで町の現状を把握し足りないものを考えることができた。また地図を作成することで、参加者達の意見の反映の仕方に工夫が生まれた。

また、発表後の質疑応答において町の大人からは参加者達のなりたい職業などを知ることができて良かったという感想があった。参加者のなりたい職業や働き方について自分たちで考え、発信し、地域に参加者の考え、それに対する課題が参加者から大人へ伝わったと言える。町の将来を支える若者に住んでもらうための課題、可能性を大人と参加者の双方が深めることができた。

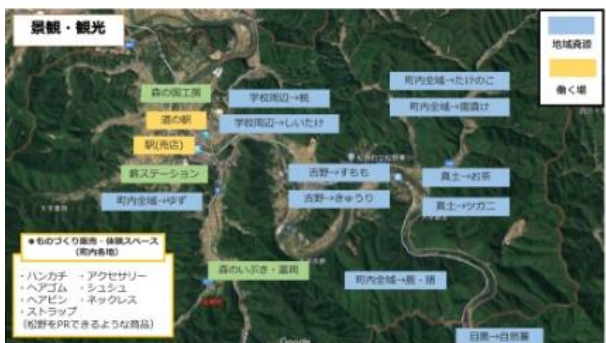


図-5:作成した一般マップ

5. 模型作成によるまちづくりワークショップ

一方、模型作成班では、松野町の道の駅をリニューアルすることをテーマとして必要なプログラムを考え、簡単に設計を行い、模型作成を行った。

5.1. 目的

インタビュー調査からは第 1 回のワークショップでの KJ 法による課題整理における「お年寄りや若い人が集う場があるといい」という点に注目し、多世代による地域の交流拠点としての場を建築模型の作成を通して中学生・高校生の視点から提案することを目的とした。

対象は現在の「道の駅 虹の森公園まつ」が立地している敷地である。中高生にとっても親しみがあり場所をイメージしやすいこと、バイパス沿いに立地し観光客との交流という視点からも発想を膨らませられることから、この敷地を選定した。

5.2. 建物に導入するプログラム

はじめに、参加者が学校帰りや休日に欲しい場所、あるいは大人になって休日を過ごしたい場所の意見を出し合った。表-3 がその中で出された意見である。

表-3:話し合われた意見

具体的な施設や場所の名称として出た意見				
ゲームセンター	カラオケ	ボウリング場	遊園地	プール
芝生の運動場	図書館	飲食店	学習ハウス	カフェ
ショッピングセンター	服屋	映画館	ネットカフェ	調理室
自転車コース	ドッグラン	調理室	学童施設	散歩コース
場所の機能やイメージとして出た意見				
Wi-Fi 環境がある	仕事の手伝いや体験ができる	おしゃべりできる	綺麗	お年寄りも入りやすい
自由に立入れる	共通の趣味を持つ人と交流できる			

* 提案に反映した要素を下線で示している。

これらの意見を元に、「お年寄りや若い人が集う場があるといい」という課題に則って今回の提案に反映する要素を話し合いにより決定した。

5.3. 要素の建築への落とし込み

次に話し合いで決定した要素を、敷地内に建築として落とし込む作業を行った。場所ごとのおおまかな面積を決め、敷地内に配置した。

外や一階、二階にどの要素を配置するかというところから、駐車場から建物に入る人の動線や歩いて建物に入る人の動線などまでが話し合われた。主に町民が普段から使用することを想定した要素が一階には置かれている。川を眺めながら寛ぐことができるように飲食店やカフェは広見川に面するように配置された。また、中学生や高校生になっても利用することのできる図書・学習スペースが設けられた。2 階には自動車で訪れる観光客のための要素がいくつか配置されている。二階の入り口は駐車場からの陸橋に直結し

ている。これは虹の森公園前の国道沿いは交通量が多いため、そのことを心配した参加者の発案で子どもや高齢者にも安全な入口を考えたものである。また、陸橋からの入り口に入って左手の吹き抜けから1階の市場の様子が見えるようになっている。そして、キッズスペースは半屋外で雨の日でも外遊びができるようになっている。

5.4. 模型の作成

中高生が各々役割を分担して模型作成をおこなった。外壁のガラス面の表現、芝生や土の表現、屋根のデザインに力が注がれた。建築模型の完成後は、人物や家具、植木などの添景模型を配置し、場所の使われ方のイメージを膨らませた。

5.5. 発表会の様子

発表会ではこれまでの経緯やスペースの使い方について報告を行った。その後の質疑応答は聞きに来てくれた方々と模型の周りを囲んで行われた。町の人から陸橋が過去に計画されていたことや、図書・学習スペースの必要性についてフィードバックがあった。模型を作ったことで質問やコメントがしやすく、大人から多くの意見をもらうことができた。

6. 考察及びまとめ

本ワークショップを企画・運営したことによって得られたまちへの関心の向上に関する考察は以下の3点である。

まず、まちに触れる機会を作ることが必要であることが挙げられる。参加者はインタビュー調査を行うことでまちに住む人を知ることができた。普段の生活の中では中高生が出会わない人や目に触れない人に会うことはまちを一方の面からではなく、多様な面を知るきっかけになる。

また、実際にまちを良くするために何が必要か手を動かして考えることである。模型作成によるまちづくり班では道の駅の建替えをテーマにし町に足りないものを考えることでプログラムを整理した。同様に町に必要なものがなにかを手を動かして考えたジョブマップ班ではまちの現状を把握することができ、提案を考えることになった。

最後に、発表し聞きに来た大人との交流である。ワークショップの発表会では大人からのフィードバックを得ることで大人がどのようにまちについて考えているのかなどを知ることができた。松野町では人が少ないため何かイベントがあると大人が集まり意見を交換している。今回のイベントでも町長や町議会議員が集まり参加者へフィードバックが行われた。このように大人が参加者の中高生の意見も聞いてくれているという実感がまちづくりへの関心を深める要因になるのではないだろうか。

例えば、町では役場庁舎の建替えを期に中高生の意見を取り入れて町民向けのスペースを作ろうとしている。その際に今回のワークショップで出た意見を取り入れることが行われれば中高生にとっては嬉しく、これからもまちづくりに参加していこうという気持ちになるのではないだろうか。このように小さな町だからこそ、実際に中高生の声が大人や町役場に届きやすく町への関心を高めるための良い環境とな

っていた。

このワークショップがきっかけとなって今後のまちづくりへ少しでも関心を持ち続けることを期待している。

【参考文献】

- 1) 土屋泰樹, 逢坂仁葵, 伊原隼人(2018),「中学生のまちづくりWSへの参加によるまちづくりへの関心の変化に関する考察 ―愛媛県松野町を対象として―」,都市計画報告集, No.18, pp.56-57, 日本都市計画学会。